

2013年(平成25年)9月1日(日曜日)

新聞 読者 寄附 啓

(第3種郵便物認可)

ミシンと日本の近代

FABRICATING CONSUMERS

アンドルー・ゴードン 著

みすず書房 3400円

評・平松 洋子 (エッセイスト)

「子どものころ、母が真剣な表情で足踏み台つきの年代物のミシンに向かい、ワンピースを縫ってくれた。黒いボディに「SINGER」の金文字。全国の家庭に鎮座していたあのミシンが、かくも深く日本の近代社会の形成に関わっていたとは！ 歴史家の緻密かつ懇切な分析が、重量級の知的興奮をもたらす力作である。

日本近現代史の研究者として広く知られる著者は、戦後の労働運動史を調べる過程で、ある事実に遭遇する——一九五〇年代の日本の既婚女性は毎日二時間以上も裁縫に費やしていた。外務省記録からミシン業界紙、婦人誌、今和

女性たちの自活促す



◇Andrew Gordon—生 1952年、米ボストン生まれ。著書に『日本から現代まで』など。

次郎や大宅壮一ほか言論人の論説まで膨大な資料を駆使する。ジョン万次郎は未知の道具に感奮してミシンを買い送ったが、日本の母は使えないジレンマを味わった。なぜなら、それまでの日本の衣服にとって【手縫い/仕立て直し】が前提だったから。しかし、シンガー社の巧みなアメリカ型販売(セールスマンや割賦販売)によって浸透、「和裁」「洋裁」の新語を生み、「和洋」という二重の概念のもとでミシンは特有の近代性を育てたと指摘する。そして家庭内に経済と文化を持ちこみ、女性の自活を促しながら社会階級やジェンダーに絡んでゆく。戦時下、生き延びる技術として裁縫の重要性を認識した日本の主婦が、戦後の消費経済と社会秩序の担い手としてミシンに向かう姿をリアルに浮かび上がらせる手つきは、見事というほかない。こと日本にあって、ミシンはオリジナルな役割を演じたと説く。「マルクスの言うところの、本来その使用者を窮乏化させる道具ではなかったし、ガンデイの主張したような質素な生活をする手段でもなかった」。中間層の暮らしに文化的な意味をあたえ、社会階層を縦走しながら女性のアイデンティティを統合したと論じる視点に、なみなみならぬ日本理解の深さを感じる。モンペの意義にも蒙を啓かれた。大島かおりの訳文は理解と共感を助けて素晴らしい。